

第1の扉 (1980年代初頭～)

- 1965年 東京都立日比谷高校卒業
- 1973年 群馬大学医学部卒
群馬大学医学部卒脳神経外科研修医
- 1975年 佐久総合病院 脳神経外科医員
若月俊一院長と出会う
- 1978年 虎の門病院 脳神経外科(虎の門分院
リハビリテーション担当) 医員
- 1978年 看護を一から学ぶ
退院後のリハビリのフォローアップ外来・往診
(ボランティア活動)。訪問活動を通じ急性期
～維持期のリハビリテーション・システム構築
が重要だと考え始める
- 1984年 リハビリテーション専門医資格取得のため
毎週東京大学リハビリテーション部に通い
上田 敏先生の下で修行
- 1985年 リハビリテーション専門医資格を取得

リハビリテーションの道へ

石川 誠さんを偲んで

さわむら せいし
澤村 誠志

兵庫県立総合リハビリテーションセンター 顧問

石川 誠先生のあまりにも突然の訃報に接し、心の訣別ができないでおります。

回復期リハビリテーション病棟の生みの親であり、わが国のリハビリテーションのさまざまな分野での偉大な実践的なリーダーを失ったことは誠に残念です。

私が初めて石川先生にお会いしたのは、1991年頃、高知の近森リハビリテーション病院でした。兵庫県立総合リハビリセンターから近森に移られ、その後も輝生会の事務局長として長年石川先生を支えてこられた森本 榮さんから、石川院長が土・日の休みの日に自転車で往診されていると聞き、すぐに高知に飛んでいき石川先生にお会いしました。ラグーマンとしてのチームワークを基本とした情熱と先見性、そして、何よりもリハ医療の現場の動き、診療報酬に精通されていることに強い感銘を受けました。

当時私は、親方日の丸の県立のリハセンターで、夢ばかりを追いかけ、当時のリハの診療報酬では黒字になるはずがないと思い、民間では経営は無理であると思っていました。

一方では、日本リハビリテーション病院協会（当時）の会長職としての責務を感じていました。石川 誠先生の詳しい説明を受けている間に、この優れた人材を日本リハ病院協会を通じて、日本のリハビリテーションの発展に生かしたいと即決いたしました。すぐに、次の理事会で理事、副会長就任を決定しました。

私が石川先生にお願いいたしましたことは、医療保険の診療報酬とともに、2000年より開始予定の介護保険の担当でした。その裏で、厚生省（当時）の“廊下トンビ”をお願いいたしました。これは私が日本整形外科学会などで義肢装具の制度改革や義肢装具士の国家資格を獲得するため常に中央省庁との良好な連携を保つ必要性を感じて自身でとった行動です。その経験を生かすために厚生行政担当者との協働を石川先生にお願いいたしました。その役割の重要性をすぐに呑み込まれ、わが国の病院がもつ現行リハ医療システムの課題、改革に向けた病院協会試案などを次々まとめては高知と霞が関を何十回と行き来し、制度改革の必要性を訴えてくださいました。

その結果、石川先生の厚労省との強い信頼関係形成を基本に、2000年4月、介護保険と同時に回復期リハビリテーション病棟が出発いたしました。この間に、回復期リハ病院から開設単位を病棟に変更したり、当面の病床目標数を6万床とするなどの討議が順調に運んだのは、すべて石川先生のご努力の賜物です。また、ご自身の創られた輝生会を、豊かな先見性と包容力をもって素晴らしい組織にお育てになりました。

石川 誠先生、長い間ありがとうございました。浜村明德先生と一緒に「兄弟船」を唄いたいです。それまで安らかにお休みください。

石川 誠先生の思い出と追悼

おおた ひとし
大田 仁史

茨城県立健康プラザ 管理者

高校、大学とラグーマンとして活躍した先生は、チームは「One for All , All for One」の精神が大切で、リハチームはもちろん病院も All for One の体制で患者に当たるべきだと説いておられました。この考えは、人の生き方のあらゆる場面に通じる人生訓で、感じ入っておりました。1986年に高知市の近森病院に、地域医療、リハビリテーション、チームアプローチ、看護体制、セルフケア、都市型リハビリテーション病院、医療経営、リハビリテーションの普遍化、リハビリテーション医療のシステム化、在宅医療、の10のキーワードをもって、赴任されたそうです。その一つひとつを成し遂げながら、2002年、東京都渋谷区に医療法人社団輝生会初台リハ病院を立ち上げられました。近森リハ病院の実績が厚労省を動かし回復期リハ病棟ができました。まさにこの病棟の生みの親です。

私は、1973年に伊豆通信病院（現 NTT 東日本伊豆病院）に赴任し、1984年頃病院の改築に当たってリハ看護を重視した今の回復期リハ病棟に似た病棟を作りました。そのような時に先生が病院に見えられ、リハ看護体制の話をしたことを記憶しています。近森リハ病院にはそのような縁もあって、スタッフの勉強会などに呼んでいただきました。

1992年、澤村誠志先生が学会長の第29回日本リハ医学会が地域リハビリテーションをテーマに開催された時、特別講演で近森リハ病院の地域活動について話されました。圧巻の講演だったことが印象に残っています。

1995年、私は茨城県の県立医療大学に赴任し、翌年から付属病院の設立と運営に腐心していました。リハの総合承認施設に看護体制が絡んでいたからです。そのようなこともあって、2001年2月に全国回復期リハ病棟連絡協議会（現在の回復期リハ病棟協会の前身）が立ち上がり、2002年6月に先生が初台リハ病院を設立される前後にたびたび初台の病院にお邪魔したのが懐かしく思い出されます。

先生には日本リハ病院協会（当時）の地域リハ検討委員会で、1991年の地域リハの定義作りの最初からかかわっていただきました。

2017年5月、東京都西南部地域リハ支援センター主催の集いに「地域包括ケアシステムと『包括的』リハビリテーション」の題で講演に呼んでいただき、その時、終末期リハについても触れたら講演後、控室に来られ、「終末期リハが重要なことがよくわかりました」と褒めてもらえました。「人は必ず地域のどこかで死んでいくわけで、人の尊厳を謳うリハが終末期にきちんと位置づけられるべきでしょうね」と話しておられ、今思うと何か暗示的な気がしました。

最後に石川先生とお話したのは2020年の11月、船橋市の公開講演の折です。船橋市は先生の口添えて早くからシルバーリハビリ（シルリハ）体操指導士養成事業に取り組んでいます。その時は少し元気を取り戻されていたようにお見受けしたのですが……。

10歳も若い石川先生の追悼文を書くなど、順番が逆だと思っています。

石川さんの情熱と先見性が回復期リハ病棟を生んだ！

はまむら あきのり
浜村 明德

小倉リハビリテーション病院 名誉院長

回復期リハ医療における石川さんの功績

石川さんの高知でのチャレンジがなければ回復期リハ病棟はない、「生みの親」である。そこで、回復期リハ病棟誕生にまつわる話を紹介したい。

確か1995年頃から、当時、日本リハ病院協会会長の澤村先生の指示のもと、「わが国のリハの発展にはリハ治療の拠点が必要である」ことを、当時リハ関係の担当だった厚生省老人保健課にお願いしていた。そのリーダーが石川さんだった。

実は、われわれ二人はリハ医学会の社会保険の委員会に所属していた。誕生の2年ぐらい前、石川さんは当時の仕組みだった「リハ専門病床群」という名称で試案を委員会に提出した。議題に取り上げられることを期待したのだが、残念ながら叶わなかった。

不思議なことに、介護保険創設の議論の中で「リハ前置主義」という考え方が示され、リハ治療の重要性を理解していただく環境が生まれてきた。加えて、石川さんの情熱により、担当課の理解が得られるようになり機運が高まってきた。流れが変わってきたのは介護保険が始まる1年ぐらい前だったと思う。

誕生の直前にかかってきた電話を記憶している。「開設は間違いはないが、基本料が要望とはだいぶ差がある」という。日頃は見せない弱気な電話であった。その時、「今回は、制度を作ることだ」みたいなことをいって励ました。

結果、回復期リハ病棟として誕生したわけであるが、3本柱の「ADLの向上、寝たきりの防止、家庭復帰」に、機能訓練だけにとらわれず、これからのリハ医療のあり様を整理した石川さんの先見性が見て取れる。そして、在宅復帰率が定められたが、このような指標が報酬上で示されたのは初めてであったと思う。

最後にゆっくり話したのは……

2年前の秋、回復期リハのセラピストマネジャーの研修会の時だった。終わってから、珍しく関係者と共に長話をした。帰りの飛行機の時間が迫り、「じゃ、帰るよ」と立ち上がった時、何だかじっと見つめていたように思う。いつも忙しそうに動く石川さんが、いつまでも残っていることは少なく、その時は私の方が先に出た。この時が最後となった。実は、この研修会では、お互いにリハ・マインドについて語った後、「何でも質問」を受け、二人で回答していた。仕事の仕方、マネジメントや組織・チームづくりの悩みだけでなく、個人的な悩み、組織への不満までいただくので、二人とも自分の生き方も併せて語っていた。この時間が私にとってはとても面白く、石川さんも楽しく過ごしていたと思う。もう、この時間は戻ってこない。寂しい限りである。

小倉行きを強かに勧めてくれたのが石川さんであり、出会っていなければ、間違いなく私は小倉にいない。彼がいつもリードしてくれて私の仕事人生があると思っている。

石川さん、かけがえのない思い出をありがとう、そして安らかにお休みください。

石川さん、ありがとう！

さいとう まさみ
齊藤 正身

医療法人真正会 理事長

1992年、浜村さん（当時、国立療養所長崎病院）との出会いから、老人医療にこそリハビリテーションが必要であることを自覚し、1994年に石川さん（当時、近森リハビリテーション病院）との出会いから、地域医療にはリハビリテーションが不可欠であることを実感しました。

お二人との出会いは、「老人の専門医療を考える会」に入会していたことがきっかけで、特に石川さんが入会されて、よりお付き合いが深まっていきました。私の熱意を感じてくださり、昼夜を問わず地域におけるリハビリテーションのノウハウを叩き込んでくださいました。憧れの存在になった石川さんに一歩でも近づきたくて、毎月のようにスタッフを連れて高知にお邪魔しました。本当にご迷惑をかけたと思います。

当時、老人医療は入院が中心で、在宅に目を向ける、あるいはリハビリテーションを積極的に展開する病院は全国的にも少ない中、石川さんの取り組みは本当に魅力的でした。老健施設「いごっばち」はショートステイが原則の入所システムで、そこで展開される在宅につながるチームによる短期集中リハビリテーション、これこそ老健の仕事だと思いましたね。私たちの病院で実践していた、各病棟にすべての職種を配置しチームとしてケアプランを活用したアプローチとスムーズな在宅ケアへの移行は、石川さんの「これがわれわれが目指す道だよね！」という言葉に後押しされて順調に進めることができました。

そのようなお付き合いを経て、急性期以降のリハビリテーション、いわゆる回復期リハビリテーション病棟（病床）構想を打ち明けていただきました。「この新たな制度には療養病床に取り組んでいる病院の参入が不可欠だ、ぜひ一緒に作り上げよう！」とスクラムを組んだことを、つい先日のように思い出します。楽しかったですね、ワクワクしました。

その後、石川さんの思惑通り、日本リハビリテーション病院・施設協会のお役目もいただき現在に至りますが、その間、決して忘れてはならない数年間がありました。それは東日本大震災に対するボランティア活動の際、多くの皆さんにご心配をかけた「喧嘩(?)」です。意見の相違があると、血気盛んな二人ですし、仲が良く好きなことがいえる存在だから余計にお互い折れないんですね。よく考えれば、とにかく早く支援に入りたい私と、しっかりした組織として活動することを目指していた石川さん、私が間違っていたのです。口を聞かなくなって数年、本当に周囲の人にはご迷惑をかけました。四人組の浜村さん、栗原さんのおかげで4年前に仲直り(?)し、それからは、石川さんからの要請にすべて応える恩返し活動が始まり、行きつけの寿司屋などで語り合うことも再開しました。

訃報をお聞きし、居ても立っても居られず、お会いした石川さんの凛々しいお姿は一生忘れません。先輩、兄貴、本当にありがとうございました。

石川 誠さんの3つの思い出

にき りゅう
二木 立

日本福祉大学 名誉教授

第1の思い出。 私が石川 誠さんに最初にお会いしたのは今から40年前の1980年代初頭、東京大学医学部附属病院リハビリテーション部においてです。私は当時代々木病院に勤務していたのですが、週1回の同部医局勉強会には必ず参加していて、お会いしました。石川さんは虎の門病院分院でリハビリテーション医療に携わり始めて、リハビリテーション科専門医の資格を取得するのを感じて上田 敏先生の下に通い、リハビリテーションの本格的な「修行」を始めたとのことでした。現在と違い、脳外科医とリハビリテーション科医の間には大きな断絶があり、私には脳外科はリハビリテーションから最も遠い科というイメージがあったため、「脳外科医からリハビリテーション科医に転身するとは奇妙な方もいるものだ」と感じました。

東大病院リハビリテーション部での研修は、石川さんが、その後1986年に近森病院にリハビリテーション科専門医として赴任し、最初は高知で、さらには東京・全国で、リハビリテーション医療の大輪の花を咲かせる原点になったと思います。そんなときに、石川さんにお会いしたのだと懐かしく思い出しました。

第2の思い出。 その後、石川さんにお会いしたのはほぼ10年後の1994年10月15日に、近森リハビリテーション病院で講演をさせていただいた時です。私は講演前に石川さんをお願いして、同病院の診療実績や経営実績等の資料を送っていただいたのですが、詳細なデータに加えて的確な経営分析がなされていることに舌を巻き、同病院にはよほど優秀な事務幹部がいるのだと想像しました。そこで石川さんにお尋ねしたところ、すべての資料は石川さん個人が作成されたとのこと、石川さんの情報収集・分析能力に驚嘆しました。しかも、石川さんからはそれらの情報の「何を使われてもご自由です」といわれてまた驚きました。当時は、各病院の経営情報は「秘中の秘」といわれていた時代で、石川さんの徹底した情報公開の姿勢に清々しさを感じました。このような石川さんの情報収集・分析と情報公開の「遺伝子」は、今も、日本リハビリテーション病院・施設協会や回復期リハビリテーション病棟協会に引き継がれていると思います。

第3の思い出。 これはいうまでもなく、石川さんが近森リハビリテーション病院での経験と実績をベースにして「回復期リハビリテーション治療病棟」の青写真を作り、それが1995-1996年に日本リハビリテーション病院・施設協会の公式要望となり、2000年度に「回復期リハビリテーション病棟」が誕生したことです。私は長年医療政策の研究をしていますが、これは一民間病院の実践とアイデアが出発点になって、国の医療提供体制改革の重要な柱が実現した稀有の例です。「回復期リハビリテーション病棟の生みの親」としての石川さんの功績は今後も永く、リハビリテーション関係者に語り継がれると思います。

石川 誠先生を偲ぶ

さいとう えいち
才藤 栄一

藤田医科大学 最高顧問

石川 誠先生との最初の出会いは2005年、藤田の七栗記念病院（当時、七栗サナトリウム）で講演をいただいた時でした。ただ石川先生にはその前から大きな借りがありました。

私は1995年に藤田医科大学へ赴任しました。七栗記念病院は三重県にあるリハビリと緩和ケアを中心とした218床の第3大学病院ですが、三重県が藤田にとってはアウェイの地ということもあり、当時、病院経営は困難を極めていました。そんな中、リハビリテーション医学講座教授に就任した1998年、七栗の起死回生策として、合理的に365日リハビリを行う「統合的高密度リハビリテーション病棟システム (FIT: Full time Integrated Treatment Program)」を考案し、専用病棟新設を計画しました。藤田赴任前に勤めていた東京のリハビリ病院で経験した土日祝日休みのリハビリ診療に大きな疑問をもっていましたので、病棟運営法についてはいろいろ考えていました。ただ、FITを構想した時点で回復期リハビリテーション病棟制度はなく、また、それが新設されることも知りませんでした。石川先生が中心となって推進し生まれた新制度によって、新棟オープンの2000年、FITはまさにそのためのシステムとなりました。いわば、私たちは石川先生の尽力にタダ乗りできたのです。その後は、制度上、365日リハビリも上位オプションになり、園田 茂病院長の手腕もあって、七栗のリハビリは一流と呼ばれるようになりました。

ですから、2005年、石川先生に直接お会いできた際、やっと恩人に対面できたという喜びでいっぱいでした。それ以来、何かにつけ、ご指導をいただけてきました。日本リハビリテーション医学会の理事に引き込んで、リハビリ医療制度の前進にお力をいただきました。また、石川先生を通して、いろいろな新しい素晴らしい仲間と知り合いになれました。2004年から毎年、名古屋で行っている「二木 立新年会」にも2008年から常連メンバーとして東京から参加してくれました。唯一、私が石川先生にもたらした良事は、私の師である千野直一先生が抱いていた石川先生への偏見を2009年に「矯正」してお二人の交流関係をつくった出来事くらいです。

石川先生の人となり「極上」であったのは誰もが認めると思います。そして、彼と知り合えたことを人生にとってかけがえのないものと感じています。石川先生がその基礎を創った回復期リハビリテーション病棟という制度がさらに発展、進化し、リハビリテーション医療そのものを牽引していくように成長させることが、私たち後進の役割と思っています。

石川先生との出会いとお別れ

なかむら しゅういち
中村 秀一

医療介護福祉政策研究フォーラム 理事長

石川先生に初めてお会いしたのは初台リハビリテーション病院がオープンした直後であった。私は当時、厚生労働省の医療保険・医政担当の審議官であり、病院見学を心がけていた。そこで早速、新病院を訪問することとした。当日、石川先生とPTの伊藤さんに応対していただいたのだが、二人とも「何しに来たのだろうか」という感じでごちない出会いであった。

その後、異動で老健局長となり、2005年の介護保険制度改正を担当することになった。準備のため「高齢者リハビリテーション研究会」を組織し、報告書を取りまとめたところ、石川先生からお声がかかり、講演することになった。それを契機に急速に親しくなったように思う。

文科系の本の読書会をしようという先生からのご発案で、2006年5月から読書会が始まり、毎週水曜日の早朝に初台リハ病院に集まることになった。新型コロナウイルス感染症の蔓延で昨年3月に休止されるまでの14年間、ほとんど毎週先生とお会いしてきた。そこで石川先生の公私にわたる姿を目近で見ることとなった。さまざまな機会でご一緒した会食や、読書会の“修学旅行”と称して読んだ本に関連のある地にメンバーで出かけた旅行は、忘れがたい思い出となっている。

石川先生は本当に魅力的な方であった。飾らない、真っ直ぐな人であった。病院においてもスタッフとフラットな関係を作られていた。私には、リハビリテーションにおいては医師のできることは限られており、スタッフの力が大きいことを繰り返し説かれた。まさにチーム医療の実践者であった。元ラガーマンとしてOne for All, All for Oneが身につかれていたのだろう。

先生は院内にとどまる人ではなかった。自転車に跨^{またが}って訪問診療を実践されていた。地域リハビリテーションの唱導者でもあり、自らの在宅ケアの拠点がある台東区や世田谷区で関係者を集めての研修会を熱心に主催されていた。終了後、地域の医師会のメンバーを誘い飲み会をするオルガナイザーとしての姿もあった。

読書会が休会となり、毎週お会いしていた石川先生ともすっかりご無沙汰してしまった。院内感染の防止などでさぞ大変の日々だろうと思っていた。お会いしたいがコロナ禍のこの状況ではご迷惑だろうとも考え、我慢もしていた。先生からお願いごとのメールをいただいたりもしていたこともあり、お変わりないものとすっかり油断していた。

まったくの偶然に、この5月の連休明けに石川先生が深刻な状態にあることを知った。青天の霹靂^{へきれき}であった。迷いに迷いつつご本人にショートメールを差し上げたところ、「おそらく今月いっぱい命かな」という返事をいただいた。それからは暗澹^{あんたん}たる思いの日々を過ごしたが、遂に覚悟していた知らせを受け取ることとなった。

6月の近森病院の広報誌によると、石川先生に講演していただいたが、その講演の収録日は逝去の前日だったとのことだ。最期まで頑張られた先生に、改めて尊敬の念を深くした。

石川 誠先生、まだ信じられません。

すずき やすひろ
鈴木 康裕

国際医療福祉大学 副学長 (厚生労働省初代医務技監)

当時、厚生省の老人保健課の筆頭課長補佐だった私は、寝る必要も感じないほど、仕事が楽しかった。当時は所管していた老人診療報酬の1998年改定、2000年に予定していた第4次老人保健事業の準備、そして地域リハの普及と新たなリハ専門の病床制度の創設(のち、「回復期リハ病床」と称される)に向けた、心躍る専門家の先生方との議論。

そんな中、「高知の近森リハビリテーション病院は、ぜひ見るべきだ」と誰もが口にする。早速高知に飛び、石川院長(当時)とお会いした。驚いた。初対面で、かつ場合によれば異なる立場で対峙することになるかもしれない官僚(医系技官)の私に、まったく隠すことなく、あらゆるデータとご自分の分析と将来ビジョンを、ものすごい熱量で語り続ける。

この人なら信じられる、と確信した。まったく私のミスなのだが、翌日の審議会の資料作りのために、真夜中に電話して「明日の朝までに資料をください」と懇願したこともあったが、笑って許していただけただけではなく、その後、「鈴木さんの寝ずの武勇伝だ」として、こちらが恥ずかしくなるほど、繰り返し「褒めて」いただいた。

石川先生とは、東京に戻られてからも、ご指導を賜ることが多かった。1998年の老人診療報酬(当時、課長補佐)を皮切りに、2009年の介護報酬改定(当時、老人保健課長)、2012年、2018年の診療報酬改定(当時、医療課長、保険局長)と、報酬改定にかかわることが多かった私だが、リハについて石川先生にご意見を求めると、多くの臨床の先生方が点数増を要望されるのに対して先生は必ず、「リハの質を上げるためには算定要件をきちんと厳格化しないとだめだ」とおっしゃった(そのせいで、批判もあったかもしれないが)。ただし、先生のおかげで回復期リハ病床制度は順調に拡大し、アウトカム評価も導入された。

先生が理事長を務めておられた初台リハビリテーション病院では週に1回早朝、輪読会が行われていた。医学関係の書籍もあったが、文化、歴史、哲学をはじめ、『祇園の遊び方』というような本も登場した。もちろん、名を成されたさまざまな職種の方々とひとときは最高だったが、私が密かに愛していたのはその後出される「朝食」だった。初台リハ病院で、外注ではなく専属の栄養士さんと調理師さんにより提供される和洋の素晴らしい(大きな声ではいえないが、わが家のものより相当に手の込んだ)食事。聞くところによると、「この食事がもっと食べたいから退院したくない」とごねた患者さんもいたとか。食器も凝っており、「食事も、生活を取り戻していくリハビリテーションの一環」とする石川先生の深い哲学が窺える名物だった。「コロナ禍で輪読会が中断されている」とばかり思っていた。先生が病を得ながらも、ご家族や職員にも気を遣わせないように気を配り、最期までご自分らしい生き方と人生の楽しみ方を続けておられたとは、寡聞にして存じ上げなかった。

石川先生、あともう1回でいいから、これからのリハについて、その笑顔とじっくりと語り合いたかったです。

恩師・石川 誠先生を偲んで

さこい まさみ
迫井 正深

厚生労働省 前 医政局長（現 内閣官房
新型コロナウイルス感染症対策推進室室長）

ここ一年、コロナ禍でお目にかかる機会が極端に減っていました。どうしておられるかな、また楽しく読書会で会える日が待ち遠しいな、と思っていました。急に飛び込んできた訃報。心にぽっかりとできた穴。常々“マグロ”と呼ばれ、いつも全力で動き回らないと生きていけない、だから風のように吹き抜けていったんですね。それもまた、石川 誠先生らしいなあ。

石川 誠先生と初めてお目にかかったのは20年前の2000年診療報酬改定、歴史に残る回復期リハビリ病棟創設の時でした。ただ、私と直接のやりとりは少なかったせいか、その後の強烈なインパクトからすれば、当時の印象は極めて薄くほとんど記憶にありません。本格的に石川先生と文字通り“膝詰め”で向き合ったのはその12年後の2012年、老人保健課長として担当した介護保険の世界でした。

一言でいえば、私の医療観は揺さぶられ、そして大きく変わっていきます。石川先生のアプローチ。理屈は語らない。取り組みや姿勢、そして「これをやりたいんだ」をシンプルに私にぶつけます。「リハビリテーション」のもつ大きな可能性がじんとう心に温かく沁みってくる。その先には希望と夢が必ずありました。社会に生きる人々の生活に寄り添い、支えてこそその医療ではないか、と。石川先生を慕い集う洗練された有識者・専門職、そして課内で介護サービスを検討するOT出身者はじめ素晴らしいスタッフとともに、困難な制度改正や報酬改定をやり遂げることができました。

この間、リハビリテーションの“実習”もしました。老健課長在任中、スキー転倒で手首を骨折、術後のリハビリを石川先生にお願いすることになったのです。週2回通院の訓練でした。しかし折角の機会、手は動かしていても口は“暇”。担当OTさんから、私の治療とはまったく関係のない、院内の日常業務や訪問リハビリの実情など効率的な“現場取材”ができました。「スパイしてるんだよなあ」と石川先生は笑い飛ばしながら、「何でも聞いて」と大らかでした。ご自身もラグビーで同じ骨折・手術を経験されその後苦労されたことも、引き受けてくださった理由の一つと後で知りました。

地域の地道な活動を大切にされる石川先生でした。ご縁があって新潟・南魚沼での地域医療研究会の演者を引き受けた時、会場の聴衆の中にいつもの笑顔の石川先生を発見。その主催者と懇意でよく参加しているんだ、と。

その後も石川先生から講演会や研究会の演者をご依頼いただき、可能な限り対応させていただきました。研究会の前後では居酒屋で関係者、いってみれば大勢の石川ファミリーとともにワイワイ現場の実情や将来の夢を語るのが定番でした。コロナ禍でしばらく遠ざかっていますが、いずれ石川先生の遺志を皆で継ぎながら、生活視点で医療を見つめ続けていく所存です。

ご冥福を心からお祈りします。そして、時々石川先生を肴に思い出話を皆で語り合う。

その時もまた、素敵なお顔でそっと語りかけてくださいね。

石川先生、最後までご迷惑をおかけしてすみません

うつのみや おさむ
宇都宮 啓

医療法人社団健育会 副理事長

「えっ、何これ？」

その記事を目にした途端、私は周りの空気ごと固まってしまった。石川先生の訃報だった。

先生がそんな状態だったことなど露知らぬ私は、実はその10日ほど前、コロナ禍で外資系の会社から辞職圧力を受けて転職を考えていた娘を、輝生会で面倒見ていただけないかとお願ひしてしまった。記事を目にしたのは面接の直前。

石川先生とは老人保健課長就任の2009年以降の付き合いなので、わずか10年ちょっと。だが互いにラグーマンということで二人の波長はすぐに同調し、公私に渡り濃密な日々だった。

飲みに行った時によく聞かされた話は「介護保険創設時にはよく三浦補佐(当時。後の老健局長)から夜中に電話がかかってきて、明朝までに〇〇についての資料を集めてくれといわれ、夜通し作業やらされたんだよ」という愚痴だった。しかしその表情はむしろ嬉しそうで、三浦さんと俺と一緒に介護保険を作ったんだ、という誇りに満ち溢れていた。

しかし、それを「この先生は夜中でも大丈夫なんだ」と解釈した私は、ある日新宿場末のゴールデン街で飲んでいて、ふと「そういえば初台は近いな」と思い石川先生に電話してしまった。23時過ぎだったが先生は来てくれた。だが「三浦さんの夜中の電話は仕事だったけど、宇都宮さんの夜中の電話はゴールデン街だった」と後々いわれることになってしまった。

周知の通り、石川先生率いる初台リハビリ病院の実力は傑出しており、高校の同級生から「母が入院し、もう一生寝たきりだと病院からいわれてしまったが何とかならないか」と懇願され先生に相談したところ、「難しいかもしれないがやってみる」といってください、ほぼ自立近くに回復したこともあった。そんな先生の腕と人格ゆえであろう。老人保健課で部下だった医系技官が、何とその後数年で次々輝生会に転職してしまった！「石川先生は私の部下を3人も奪った」と批判(?)すると、「いやいや、一人は元々うちから出向したヤツじゃないかぁ」と、眉を下げ、ちょっと困ったような笑顔で反論されていた姿が忘れられない。

そういった伏線があり、ちょうど事務職募集と出していたHPを見て娘をお願いしてしまった。電話した時、先生の周りが異様に静寂だったことを思い出す。個室に一人でいらしたのだろう。そして最後のショートメールのやりとりはご逝去6日前。今でも消せない。

もちろん、石川先生から仕事面でご指導・ご支援いただいたことは数限りない。実は、すでにかかなりの体調不良ということも知らず、昨年末には「リハビリ団体を動かし、コロナで危機に瀕するリハビリ病院を支援するよう国に働きかけてください」とお願いしてしまった。先生は快諾して直ちに行動された。

本当に最後まで、そしてご逝去後にまでお世話いただき、またご迷惑をおかけしてしまい申し訳ございません。どうぞ安らかに眠りください。そしてコロナが落ち着いたら先生の一周忌など、時々天国から降りてきて、ぜひ一緒に酒を酌み交わしましょう！

誠さんの夢と情熱

おおくま ゆきこ
大熊 由紀子

国際医療福祉大学大学院教授（前 朝日新聞社論説委員）

まこっちゃんさま

「さん」で呼び合う懇親会でのあたたかな雰囲気、ポスターセッションの熱気、石川 誠という方の人生の成果を垣間見させていただいた思いでした。

この「思い出」を書くためにメールを見返して見つけた、5年前の私からのメールです。初めての出会いは、30年前の高知空港。

「先輩、荷物をおもちします！」が第一声でした。同じ高校で私が7歳上なのだそうで、上下関係を重んじる体育系らしい言葉遣いに驚きました。前年の1990年に書いた『「寝たきり老人」のいる国いない国』の話を病院で話してほしい。その時『「いない国」のファーストネームで呼び合う、上下のない文化についても、話してほしい』という注文でした。

誠さん自身の表現を借りると、当時の高知の病院はこんなふうだったそうです。

「リハにまったく無関心な医師と看護師。チームアプローチとは名ばかり。PT・OTは各訓練室に閉じ籠もり、極めて不仲。STは高見の見物。ソーシャルワーカーは諦めの心境。在宅ケアサービスの実践は皆無」。それから25年たって、「さん」で呼び合う文化とリハビリテーションをおもう熱気が、輝生会グループにごく自然に溶け込んでいるのに、感激したのです。

確か、2000年頃のこと。誠さんから、突然電話がありました。「お嬢さんをください」。

といっても、もちろん結婚の申込みではなく、いよいよ、初台にリハビリテーション病院を立ち上げるので、リハビリテーション専門医の資格をもつ娘、るりに白羽の矢を立てたようでした。

今では信じられないことですが、当時の誠さんの医学界での評判はさんざんなものでした。「あんなヤクザみたいな男のところに行ったら、君の医師としての信用はおしまいだ」と真剣に忠告してくれる先輩がたくさんおられたそうです。娘は嚙下りリハビリテーションの師、藤島一郎先生のもとで修行していた時、誠さんたちと食事をしたことがあり、その夢に心惹かれていたとのこと。先輩方の忠告を振り切って初台リハビリテーション病院の立ち上げにかかわることになりました。

誠さんの夢と情熱が厚労省の担当者の心を動かし、この分野で採算が成り立つようになったことはよく知られていますので、あまり目立たない食事への心配りについて。初台リハ病院では各階ごとに、ごはんを炊くのだそうです。その香りが患者さんの心を目覚めさせるように。

ご自身のお考え方からか、その死は、一般紙には報じられませんでした。

私が、志ある方々に送っている通称、えにしメールを読んでびっくりした方たちから次々と電話がかかってきました。「ええ男やったのに」「オトコの中のオトコだったのに」。なぜか、豪傑肌の女性からが多かったのです。

豪快な最期

いべ としこ
井部 俊子

長野保健医療大学教授 副学長・看護学部長

初台リハビリテーション病院職員は、「石川さん」と呼んでいましたが、私は石川さんはやはり「石川先生」でした。

石川先生との最初の出会いはいつだったのかははっきりしないのですが、ゴディバの引き出しのチョコレート箱をいただいた頃だったと思います。いや、それ以前になにかの研修会でお会いしていたかもしれません。「あなたの講演は率直でいい」といわれたことがありますから。

当時、私が勤務していた聖路加看護大学（現 聖路加国際大学）の学長室に足音高くやってきた石川先生は、私が今まで手にしたことの無い豪華なゴディバを差し出して、初台でやっている読書会に来ないかと誘っていただきました。

背が高くスラリとしている割にはシャイな石川先生の誘いで、私は水曜日の早朝に初台リハビリテーション病院の食堂で開かれている読書会のメンバーになりました。これもまた豪華な朝食をいただいて職場に向かうという生活が何年も続きました。と申しましても、私は皆勤したわけではありません。読書会は指定の本を輪読するのですが、ある時は私が推薦した世阿弥の『風姿花伝』を「漢字が多くて困る、しかも推薦した本人が欠席が多い」などといわれたことがあります。私は世阿弥の「秘すれば花なり」の箇所を見つけたかったのです。

その読書会のメンバーで長崎に旅したことがあります。リハビリテーション病院見学のあとのホテルで“お座敷芸”を教えてもらいました。手拭いを頭にのっけて男女の区別をして物語るのです。妖艶なセリフはリズムカルで私はすぐにとりこになりました。石川先生の粋な一面をみました。石川先生と私のお座敷芸は大好評でした。もう一度、教えてもらいたいと思ったのですが、叶わなくなりました。

その後、職場が長野が変わったこともあり、読書会は「休学」を申し出てご無沙汰していました。そういうわけですから、石川先生が聖路加国際病院に入院されて手術を受け治療を続けられていたことはまったく知りませんでした。

2021年5月の初め、「外来に来ているが、身体が辛そうなので何とかできないか」という電話が陽子さんからありました。そこで初めて石川先生の容態を知りました。外来のストレッチャーの上で久しぶりの再会をしました。石川先生は、「輸血をしたら元気になったよ」と、車いすから立ち上がってみせました。「やはり男は立たなくてはだめですね」と私がいうと、「またー」といつもの石川先生に少しだけ戻りました。何日間か通院で対症療法をしていた石川先生は、6月解禁の鮎釣りに行くために新しいキャンピングカーを購入していました。その時がくるように私は願っていましたが、2021年5月24日「6時45分に亡くなりました」という知らせがメールで届きました。豪快なエンドオブライフでした。

本当に愉快・痛快な思い出ばかり

こやま ひでお
小山 秀夫

社会医療研究所長(兵庫県立大学 名誉教授)

とんでもない情熱と行動力で「回復期リハビリテーション病棟」制度を創造した盟友 石川 誠先生の思い出のいくつかを書きます。医学書院の『病院』1990年4月号に「在宅ケアの交差点——国際的動向からみた在宅ケア」という文章が公表された直後、近森リハビリテーション病院から架電「何しろ話がしたいので高知に来てほしい」という連絡を受けてお会いしたのが最初です。

高知や東京で何度もお会いしました。ラグーマンでがっちりした体育会系で、好奇心といったら失礼かもしれませんが「勉強好き」です。「どうなってるの」「どうしてなの」「何読めばいいの」と質問攻めで、何とか答えると必ず「わかった」といってくれ、ほっとしました。小倉リハビリテーション病院の浜村明德先生とは本当に仲良しで、二人は兵庫県立リハビリテーション中央病院名誉院長の澤村誠志先生の助さん格さんだなどといって、いつも「兄弟船」を熱唱していました。

何年もお付き合いしてから「アメリカのリハビリテーションをみたい」とおっしゃるので、一緒しました。シカゴのレストランで「オニオンフライ」を注文したら、山のようにでてきて大笑いしたり、別のステーキハウスで1キロはあろうかというTボーンステーキと格闘したりしました。旅行中「東京に帰ろうと思っている」とポツンといいました。「カネも場所もない」とのことで、答えようもありません。

結局、2年後に東京に戻ることにになりましたが、まず、都内にタダ同然で場所を見つけ、そこでクリニックを開き仲間を集める、それから日本一のリハビリテーション病院を目指すことになりました。も一メチャクチャというか無計画でみていられませんでした。それが信念のマジックの始まりでした。タネあかしはできませんが「強運」です。

1999年暮れ二人で向かい合い「回復期リハビリテーション病棟の創設が診療報酬で決定するみたい」とわたしが話すととても喜んで酒杯をあげました。その後、初台リハビリテーション病院が開院しましたが、毎年度損失計上です。完全に過剰人材投資が原因ですが、何とも思っていないように振る舞います。一度だけ「病院経営がこんなにも大変だとは知らなかった」と青ざめていましたが「日本中にリハビリテーション専門病院創るんだ」と絶好調でした。肯定的で積極的でしたよ。

最後が公設民営の船橋市立リハビリテーション病院のプロパーザルです。何かの巡りあわせで、わたしが審査委員、応募者が石川先生でした。何度もいわれました、「小山さんは会議中、笑顔もなく冷たくてヤナ感じだった」と。そりゃあそうでしょう。わたし国家公務員で公正・中立な審査会の会場で「元気～？」なんていえませんよね。本当に愉快・痛快な思い出ばかりです。今度は天国で車座になって皆で飲み明かしましょう！

熱い心 全力で走り、背中で牽引

なかむら はるき
中村 春基

日本作業療法士協会 会長

残念の一言です。

石川 誠先生のお話は澤村誠志先生より、近森リハビリテーション病院時代からお聞きしていました。また、同僚の森本 榮先生が同病院に就職されたこともあり、勝手ではありますが身近な先生として思っていました。

その後、初台リハビリテーション病院を設立され、フルオープン前に見学させていただいた際、美味しい昼食をご馳走になったことを昨日のこのように思い出します。その折、「先生」の呼称はやめ、職員全員「さん」づけにしていると聞きし、まさかと思っていましたが実際に理学療法士の方が「石川さん」と呼んでいるのを見てびっくりしました。澤村先生に「澤村さん」……とてもいえそうにありません。

思い出しますと、さまざまな場面でご一緒させていただきました。

印象に残っているのは、回復期リハビリテーション病棟創設にあたって厚労省の担当官を前に、「こんなに重装備な人員配置、環境を備えた病棟は全国でもひとつしか開設できないだろう。しかし、必要なことは明らかであり、ぜひ創設すべきである」と、朗々と論陣を張られていたことです。「本当にできるのか？」と思いましたがそれから20年余。2021年3月時点で9万床を超え、2020年度の入院医療費全体に占める割合も6.3%となり、国民の健康と幸福にはならない病棟になっています。本当に大きな足跡を残され、そのもとで多くの作業療法士が働いております。

また、石川先生は日本訪問リハビリテーション協会設立の立役者であり、初代会長を長きにわたり務められ、この領域のリハビリテーションを牽引してこられました。私は同協会の監事を務める関係から何回か理事会で一緒いたしました。常に変わらぬ理念、サービスの質、専門職のあり方、チームについて熱く語っていらっしゃいました。東京で開催されたと記憶している同協会の10周年記念式典でも、さらに多くの訪問リハビリテーション事業所が必要なこと、団体としてさらに成長すること、国をリードする気構えなどについて話をされました。いつも熱い心の石川先生でした。

最後に、石川先生といえばラグビーですが、ラグビー魂で本当に日本のため、患者様のため、職員のために全力で走り、背中で引っ張ってこられました。先生のこれまでの実績と思いを胸にさらに精進して参りたいと存じます。

石川 誠先生とご一緒できたことに心より感謝申し上げ、哀悼の言葉とさせていただきます。

関連団体による協働とリハ理念の共有を望まれていた先生へ

ふかうら じゅんいち
深浦 順一

日本言語聴覚士協会 会長

石川 誠先生がお亡くなりになったという知らせをいただいた時、ご病気であったことをまったく知らなかったこともあり、驚きと悲しみの思いを強くいたしました。本年の6月10日には第58回日本リハビリテーション医学会における私の専門職特別講演の司会の労を取っていただく予定でもあったので、思いもよらないことでした。私の講演に対して先生からのご批評を受けたかったと強く思っているところです。本当に残念でした。

さて、私は2005年6月に協会会長に就任するまでは、耳鼻咽喉科に所属していたこともあり、リハビリテーション関連の医師、理学療法士、作業療法士の方とのお付き合いはほとんどありませんでした。その中で、ご承知のように2006年診療報酬改定は疾患別リハビリテーション体系や標準的算定日数上限が定められた改定であり、リハビリテーション関連団体が一致協力して対応していこうということで、2005年11月にリハ医療関連団体が結成されました。

この際に先生は中心的役割を果たされ、現在の全国リハビリテーション医療関連団体協議会への発展の礎を築かれました。私はこの会合の中で先生と知り合い、先生のお人柄に触れ、多くのことを学ばせていただきました。先生は参加団体が診療報酬、介護報酬に関する意見交換、集約だけでなく、リハビリテーションの理念も共有することを望まれていたと思います。このことは残された私たちが今後も追いかけていくテーマであり、その理念のもとでよりよきリハビリテーションを提供していくことで、先生の思いに少しでもお応えしていきたいと思っています。

先生とお話ししてきた中で私の印象に残っていることは、2008年の京都で3協会が主催した地域リハ・ケアフォーラムで講演していただいた時のことです。その前日の懇親会の席で「理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の3協会が共同してこのように事業を進めていることは以前は考えられなかった。本当によかった」と嬉しそうにいわれました。その後も半田理学療法士協会会長や中村作業療法士協会会長と私のご一緒させていただいた時はいつも同様のことをいわれていました。先生は、私ども3協会が協力していくことを強く願っておられたのだと感じていました。今改めて、私どもの次の世代もそうあってほしいと願っています。

最後になりますが、先生の私ども言語聴覚士への温かい励ましに感謝申し上げますとともに、私どもがそれに応える努力を続けることをお誓いし、追悼の言葉といたします。

石川 誠さんを偲んで

さいとう ひでゆき
斉藤 秀之

日本理学療法士協会 会長

回復期リハビリテーション病棟の創設者であり前 回復期リハビリテーション病棟協会会長である石川 誠先生が2021年5月24日逝去された。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

石川 誠先生を知ったのは、私が理学療法士として働き始めた1987年頃である。私は105床で開院する地元の病院に新卒理学療法士でありながらリハビリテーション部門の開設を担っており、開設にかかるさまざまな資料や情報を探していた。そうした中、機関誌や講演などで、高知市の近森病院が、地域リハビリテーションの拠点施設としてどのように生まれ変わっていったか、回復期リハビリテーション病棟の原点であるリハビリテーション病院のストラクチャー、プロセスを見聞きし、これだと思ったことを今でも鮮明に覚えている。技術面は『リハビリテーション技術全書』であったが、運営に関しては、後年出版される『夢にかけた男たち ある地域リハの軌跡』（石川 誠・河本のぞみ共著 1998年）が私にとってはバイブルとなった。

ある時、実践していたリハビリテーションの請求や実施体制が特定共同指導の対象となり、厚生省として是正すべき点を巡り判断がつかなくなったことがあった。その時、行司役として石川 誠さんが来院され、直に評価を受ける機会があった。その時の裁きの見事さについては触れないが、その後電話をいただき、あのお声で「どうだ？」と回復期リハビリテーション病棟協会の理事に推挙された。その時の体の震えは今でも忘れない。そして、PTOTST委員会に所属し、初代委員長の松木秀行さん、先輩委員とともに回復期セラピストマネジャー認定コースの創設メンバーに加わった。カリキュラムと講師を最終確定する時に石川さんの前でプレゼンし質疑応答した時の緊張感も忘れられない。その時の即決即断、講師陣の決め方など、迫力とともにその思考の一部を垣間見た。

2021年6月5日に私は日本理学療法士協会会長に就任した。実は会長選に挑むことを決意し回復期リハビリテーション病棟協会の役職を辞することについて石川さんに相談したく今年4月、上野の輝生会本部に伺いお話をした。私は先生のお体のことを何も存じておらず緊張感のためか、まったくそうした素振りを感じなかった。眼前には迫力満点で包容力があり是々非々のいつもの石川 誠さんがいた。会長になったらとにかく云々と助言を受けた。「今度高知に行くんだろ？」「こんな辛口の話するんだが、いいかな？」「訪問リハビリテーションステーションはなぜ必要なんだ？」など、認定コース前の口頭試問さながらの石川 誠さんがいた。そして、高知で一献交えられると楽しみにしていた。

思い出、エピソードは尽きない。最後のひと時での一言一句を遺言と心に刻み、先生の遺志を継ぎ、与えられた立場で日本の地域リハビリテーションの発展に取り組んで参ります。

合掌

2つの思い出

はんた かずと
半田 一登

日本理学療法士連盟 会長（前 日本理学療法士協会 会長）

私は1971年に理学療法士になり、九州労災病院に就労しました。お陰で日本のリハビリテーション医療の草創期の方々から教育や示唆を受けて育ちました。その後、さまざまな経緯の下で2007年に日本理学療法士協会の会長になり、出会った方の一人が石川 誠先生でした。

初めてお会いしたのが診療報酬等を協議する5団体協議会（現在の全国リハビリテーション医療関連団体協議会）の場で、「何と目の鋭い方」というのが第一印象でした。

もう一つ印象的だったのは会議におけるリーダーシップの発揮でした。日本理学療法士協会の会長として、見習いたいリーダーシップと思いながら私は実現することはできませんでした。

以下2つの思い出を書かせていただきます。

思い出1

2008年頃でしたか、京都で開催された3団体主催の研修会の前日に石川先生から「今晚、空いていないか」と問われ、行った先には作業療法士協会 中村会長と言語聴覚士協会 深浦会長のお二人がすでに到着されていました。私たちは何か怒られるかもしれないと戦々恐々としながら石川先生の到着を待ちました。そこに現れた石川先生の表情は、苦虫のようなものではなく、初めて見るようにこやかなものでした。そこで先生は「リハビリテーション専門職3団体が今日のように仲良く、前向きな関係ができたことが本当に嬉しい」といわれたのです。その日は石川・中村・深浦3氏が痛快に飲んでいたことを思い出します。ちなみに私は下戸です。

その後、石川先生が何で3団体が仲良くなったことをあんなに喜んでくれたのか考えることがありました。リハビリテーション医療のチームとしてのあるべき姿からなのか、職能団体として、公的保険等に対応するためだったのか、今になっては確認することはできません。ただ、京都でのあの笑顔は忘れることができません。

思い出2

私は会長になって以来、データに基づく報酬等の要望を本会の大きなテーマにしました。2010年、2012年診療報酬改定ではさまざまなデータを作成し、本会の要望として厚労省と渡り合いました。その結果、想像以上の成果を得ることができ、私はデータによる診療報酬要望に少し自信を感じ始めていました。

そんなある日、石川先生と同席する機会があり、私は先生に「これからさらに必要なデータを作成し、報酬改定等をリードします」といいました。私は「そうか、大事なことから頑張れよ」という言葉を期待していたのですが反応は真逆でした。黙って、あの怖い目で眼鏡越しにじっと睨みつけられたのです。その反応に私は「あれー」と思うばかりでした。

その後も私はデータに基づく要望を続けたのですが、その件について石川先生と論じることはないままでした。ただ、あの時の怖い顔は忘れることができません。